

氏名(本籍)	^{あさ} 浅 ^み 見 ^{ひろし} 洋(石川県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1585号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	西田幾多郎とキリスト教の対話
主査	筑波大学教授 博士(文学) 竹村牧男
副査	筑波大学教授 博士(文学) 河上正秀
副査	筑波大学教授 博士(文学) 棚次正和
副査	筑波大学教授 野田茂徳

論文の内容の要旨

本論文は、西田幾多郎がみずからの哲学の形成に際して深くキリスト教と対話し、摂取ないし批判し、最終的に独自の宗教哲学を打ち出す過程を明らかにしたものであり、一方現代日本のプロテスタント神学者が西田と対話し、キリスト教の可能性を追求するありようをも分析している。すなわち、西田とキリスト教の交渉を双方向から考察することを通じ、現代という境位において、キリスト教に基づいた宗教哲学を樹立していくことを意図するものである。

本論文は、序論、第1章 キリスト教との対話とその理解、第2章 宗教哲学と宗教的経験、第3章 現代日本のキリスト教思想と西田哲学、結語 新たな創造的対話へ、から構成されている。

序論には、西田が多くのキリスト教思想家と対話したのみならず、西田の周辺に多くのキリスト者がいたことを指摘し、西田とキリスト教の関わりは軽視しえない重要な問題であることを主張する。

第1章では、西田のキリスト教との対話の過程を『善の研究』以前から最晩年に至るまで克明に追跡、究明する。その資料は、著作だけでなく、広く日記・書簡・メモ類にまで及んでいる。その結果、かなり若い時期に一種のキリスト教体験があったこと、『善の研究』執筆時は、中世キリスト教神秘主義者が対話相手となったこと、その後、アウグスチヌス、キルケゴールらに対話相手が移行していき、それが西田の中・後期の哲学の展開、絶対無の場所、絶対矛盾的自己同一等の思想に深い影響を与えていること、最後にバルト批判を通じて、場所的論理的な神学の考えに達し、逆対応と平常底を柱とする「場所的論理と宗教的世界観」の論文が完成していくこと、などを解明している。こうして、第1章において、西田の哲学・宗教哲学の形成に、キリスト教との思想的対話が実に深く、かつ不可避免的に関わっていたことを諸文献に基づき、実証的に論証する。

第2章では、西田の哲学形成にとりわけ大きな影響を与えた西洋思想をとりあげ、西田のそれとの対話の様相やそれに依拠した宗教的体験についておのおの詳細に考察する。特にこれまであまり取り上げられてこなかった、英国哲学やショーペンハウアーなどを取り上げ、その西田への深い影響を明かしている。また『全集』未収録の俳句をとりあげつつ、西田における芸術経験と宗教経験の関係を掘り下げている。一方、W・ジェームズの『宗教的経験の諸相』と『善の研究』の第4編 宗教論との呼応関係を詳しく指摘する。さらにキルケゴールとの対話に論及し、西田自身の課題であった「近代日本における主体的自己の確立」にキルケゴールのパラドックスの思想が重要な鍵となったことを示す。最後にバルトとの対決を考察して、西田はバルトの終末論の理解を受け入

れつつ神の超越性への理解において決定的に別れていくことを論じている。

第3章では、現代の宗教間対話に先駆的な役割を果たしたプロテスタント神学者、北森嘉蔵と滝沢克己をとりあげ、二人の西田との対話の実際を追跡・究明する。北森はその「神の痛みの神学」において、西田の絶対矛盾的自己同一の論理構造を受容するが、その矛盾の質を問題とし、神を無として捉えることを批判したことを明かす。一方、滝沢の「インマヌエルの神人学」は、神と人との不可逆を唱えるバルトの神学と西田の哲学との調停の試みと見うることを指摘する。こうして、北森は西田に対し対決的、護教的であったが、滝沢は西田を受容しつつ現代日本の宗教間対話に道を拓いたと、その対照的性格を浮き彫りにしている。

結語において、西田がキリスト教と深く対話してのちみずからの宗教哲学を形成したことをふまえ、その到達点としての場所的論理的神学の吟味・検討が現代日本キリスト教思想家にとっての大きな課題であると同時に、みずからキリスト教体験に基づきつつそれを普遍的に説明しうる宗教哲学を構築していくことが求められていると述べている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

従来、西田幾多郎の宗教哲学に関する研究は、少なくないが、その多くは禅ないし仏教との関係から考察するものであり、キリスト教との関連について指摘するものがあっても断片的であった。本論文は、西田の極めて若い時から最晩年に至るまで通して、キリスト教との関係を綿密に追跡したもので、このような包括的な研究はこれまで皆無である。しかもこの研究の結果、西田の哲学そのものの展開に対し、いかにキリスト教との対話・対決が大きな役割を果たしていたかを明らかにした点は、画期的な成果であり、西田哲学研究に大いに資するものとして高く評価できる。また、知られていなかった事柄を初めて明らかにしたことも少なからずあり、西田研究の基礎的基盤の充実をもたらしている。

たとえば、西田の絶対無の場所の概念の成立に、アウグスチヌスの三位一体論における自覚の構造と真実在に関する思想が深く関与していたこと、また、永遠の今の自己限定や絶対矛盾的自己同一などの思想は、キルケゴールの瞬間、時の充実の思想や神と人とのパラドキシカルな関係に関する思想との対話に深く根ざしていることを明らかにした点は大きな成果である。このような丹念な分析をふまえることによって、西田がキルケゴールをさらに越え、弁証法神学やバルトの思想と対決し、独自の宗教哲学を形成していく過程が詳しく解明されることになった。

一方、西田には参禅時のころキリスト教の宗教体験があったこと、英国の哲学者、T・H・グリーンの影響が参禅への動機の一つとなったこと、未公開俳句（『北辰会雑誌』にKN生にて掲載）の作者が西田であること、『善の研究』の「ガタテヤの信徒への手紙」の引用は、W・ジェームズの『宗教的経験の諸相』によるものであること、西田はショーペンハウアーと相当に対話するも意思の評価において別れていくこと、1930年ごろの読売新聞文化・宗教欄に種々の西田関係記事があること、三木清の西田への影響は、弁証法神学や実在哲学の分野にもあったことを看過すべきでないこと、等々は本論文が新たに指摘・解明したことであり、西田研究を大きく前進させた。

以上のような成果を含むことにより、本研究は今後の西田研究が必ずや参照すべき業績となっていよう。

なお、プロテスタント神学者の北森嘉蔵と滝沢克己の二人をとりあげ、この二人がいかに西田の宗教哲学と対話したかも分析しているが、両者の西田への応答のありようが的確にまとめられ、その対照的な性格をよく描いている。このことも西田の宗教哲学の問題点や可能性の考察に豊かな手がかりを提供している。

ただし、本論文に問題もないわけではない。まず、総じて実証的研究に終始していて、西田の立場そのものの哲学的考究が乏しい憾みがある。実証的研究の手堅さは評価しうるが、著者自身が西田とどう対話し、対決するのかもまた問われるところである。この辺は、今後の課題であろう。また、西田の根本的立場を禅と規定し『善

の研究』以来、最後までそれは一貫しているという判断が全編を通じて見られるが、この見方はやや通俗的を免れず、むしろ本論文の成果から細密に見なおすべきである。

以上、本研究は多少の不満もあるものの、西田幾多郎の哲学の営みにキリスト教思想がどのように関わっていたかについて詳細に明かすものであり、斬新な視点と種々の新知見は高く評価することができ、学界に大きく貢献するものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。